

8月予報（全14枚）

病防第65号
平成21年7月31日

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）
平成21年度発生予察情報第5号を下記のとおり発表したので送付します。

平成21年度発生予報第5号（8月予報）

1 向こう1ヶ月の気象予報：平成21年7月24日福岡管区気象台発表（単位：％）

要素	予報対象地域	低い （少ない）	平年並	高い （多い）
気温	九州北部全域（含、山口県）	40	40	20
降水量	九州北部全域（含、山口県）	20	40	40
日照時間	九州北部全域（含、山口県）	50	30	20

2 発生予報の概要

作物	病虫害名	発生量		作物	病虫害名	発生量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
早植 水稲	穂いもち	㊦少	並	大豆	ハズエンヨウ	㊦多	㊦多
	紋枯病	並	㊦少	茶	炭疽病	㊦少	並
	トビイロウンカ	並	㊦多		チャノカクエンハチ	並	並
	コブノメイガ	㊦少	㊦多		チャハマキ	㊦少	㊦少
	カメムシ類	並	並		チャノホソガ	㊦少	並
普通期 水稲	葉いもち	並	並		チャノヤブミ	並	並
	紋枯病	並	㊦少		チャノミドリメコバエ	並	並
	トビイロウンカ	㊦多	㊦多		カザリダニ	㊦少	㊦少
	セジロウンカ	並	㊦多	かんきつ	かいよう病	並	並
	コブノメイガ	並	㊦多		黒点病	㊦少	並

作 物	病 害 虫 名	発 生 量		作 物	病 害 虫 名	発 生 量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
かんきつ	ミカンハダニ	並	やや少	イチゴ (育苗床)	炭疽病	やや少	やや少
	チャノコアザミ	やや多	やや多		うどんこ病	やや多	並
	カガラムシ類	並	並		ハダニ類	やや多	並
ナ シ	うどんこ病	少	並	夏秋 キャベツ (高冷地)	細菌性病害 (黒腐病等)	並	やや多
	ハダニ類	並	やや少		コナガ	やや少	並
カ キ	炭疽病	やや少	並	夏秋 果菜類	コナガ	並	並
果樹全般	カメムシ類	並	やや少		アザミ類	やや多	やや多
夏秋トマト ・ミニトマト (高冷地)	葉かび病	少	少	野菜全般	ハスモンヨトウ	やや多	やや多
	すすかび病	並	並		オオタバコガ	並	並
夏秋ナス (平坦地)	すすかび病	やや少	並				
夏秋キュウリ (高冷地)	べと病	やや多	並				
	褐斑病	やや少	並				

3 予想発生量、発生時期、根拠、対策等

水稻（早植）

1) 穂いもち

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、穂いもち（早期・早植）は発病株率 2.4 % (平年 10.2 %)、発病度 0.6 (平年 2.7) と平年より少ない発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の穂いもちの発生は平年並～少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か低く、降水量は平年並か多い予想である。

(3) 対策 ア 穂いもち発病後は防除効果が低下するため、適期防除を行う。粒剤は、出穂前の所定の使用時期に散布し、粉剤、水和剤は、穂ばらみ期から穂揃い期にかけて防除を行う。

2) 紋枯病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率 4.2 % (平年 4.3 %) と平年並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か低く、降水量は平年並か多い予想である。

- (3) 対策 ア 穂ばらみ期の発病株率が要防除水準(発病株率 20%)に達した場合は、粉剤、水和剤等により穂ばらみ期から出穂期にかけて防除を行う。

3) トビイロウンカ

(1) 発生量：並

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、0.9頭/10株(平年 0.4頭/10株)と平年並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～少であった。

ウ 生産環境研究所(合志市)の予察灯では、7月は平年よりやや多い誘殺数であった。

- (3) 対策 ア 8月上旬に「100頭以上/100株」確認された場合には、幼虫発生初期に防除を行う。

イ 水稻の株元に生息しているので、粉剤及び液剤で防除する場合は株元に付着するように散布する。

4) コブノメイガ

(1) 発生量：やや少

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、1株当たり巻葉数 0.0(平年 0.3)と平年よりやや少なかった。

イ 病害虫防除員の報告では、7月の発生は平年並～少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か低く、降水量は平年並か多い予想である。

5) カメムシ類

(1) 発生量：並

- (2) 根拠 ア 6月のイネ科雑草地でのすくい取り調査では、早期水稻地域でクモヘリカメムシの捕獲数は平年より多かったが、早植水稻地域の重要種であるアカスジカスミカメの捕獲数は平年より少なかった。

イ 生産環境研究所(合志市)の予察灯では、アカスジカスミカメは平年より少ない誘殺数であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並であった。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年並か低く、降水量は平年並か多い予想である。

- (3) 対策 ア 水稻出穂後における周辺雑草の除草は、本田への飛来を助長するために行わない。

イ 周辺より出穂が早いほ場は、飛来が多くなりやすいので注意する。

水稻(普通期)

1) 葉いもち

(1) 発生量：並

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病は認められなかった(平年：発病株率 0.7%、発病度 0.2)。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多～少と地域によって差が見られた。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か低く、降水量は平年並か多い予想である。

- (3) 対策 ア 葉いもちが発生し、上位葉への進展が見られる場合は薬剤を散布する。

2) 紋枯病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発生は認められなかった(平年：発病株率 0.1 %、発病度 0.0)。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か低く、降水量は平年並か多い予想である。

(3) 対策 ア 穂ばらみ期の発病株率が要防除水準(発病株率 20 %)に達した場合は、粉剤、水和剤等により穂ばらみ期から出穂期にかけて防除を行う。

イ 粒剤の防除適期は、出穂 30 ~ 10 日前頃であるが、薬剤の種類によって防除適期が異なるため注意する。

ウ 8月の気温が平年より高く推移した場合は、7月は少発生であっても多発する傾向があるため、ほ場での発生状況には注意する。

3) トビイロウンカ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、0.1 頭 / 10 株(平年 0.1 頭 / 10 株)と平年並の発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)の予察灯では、7月は平年よりやや多い誘殺数であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並~少であった。

エ 生産環境研究所(合志市)における 7月 21 日現在の払い落とし調査(無防除田)では、成幼虫数が 12.1 頭/10 株であった。7月 21 日現在まで発生がなかった前年および前々前に比べて多い。

(3) 対策 ア 8月上旬に「20 頭以上 / 100 株」、または 8月中旬~下旬に「100 頭以上 / 100 株」確認された場合は、幼虫発生初期に防除を行う。

イ 水稻の株元に生息しているので、粉剤及び液剤で防除する場合は株元に付着するように散布する。

4) セジロウンカ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、5.4 頭 / 株(平年 1.3 頭)と平年よりやや多い発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並~少であった。

ウ 生産環境研究所(合志市)と天草農業研究所(天草市)の予察灯では、平年より少ない誘殺数であった。

5) コブノメイガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、1 株当たり巻葉数 0.0(平年 0.2)と平年並であった。

イ 病害虫防除員の報告では、7月の発生は平年比やや多~少と地域によって差が見られた。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か低く、降水量は平年並か多い予想である。

(3) 対策 ア 生産環境研究所(合志市)のネットトラップの捕獲状況から、本年は 6月 24 日、7月 1 日、7月 10 日頃に飛来があったと思われる。これらの飛来日を起算とした有効積算温度(7月 23 日現在、熊本市アメダスデータ)による次世代の発蛾最盛期は、6月 24 日飛来は 7月 29 日、7月 1 日飛来は 8月 3 日、7月 10 日飛来は 8月 11 日と予想される。

イ 発生が多いほ場では、発蛾最盛期(粒剤)または発蛾最盛期の 1 週間後(粉

剤及び液剤)に防除を行う。

ウ 薬剤散布にあたっては使用基準を遵守し、周辺環境等へ飛散の無いよう十分注意する。

大豆

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、播種が遅れている地域が多く、発生を認めなかった(平成：0.1頭/10株)。

イ フェロモントラップによる7月の調査では、生産環境研究所(合志市)、茶業研究所(八代市)および阿蘇市波野で平成比やや多、高原農業研究所(阿蘇市)、山都町鶴底で平成比多の発生であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は認めていない。

エ 気象予報によると、8月の気温は平成並かやや低く、降水量は平成並か多い予想である。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するため、若齢幼虫による白色化した被害葉(白変葉)が認められたら薬剤を散布する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

ウ 最新のフェロモントラップデータは、病害虫防除所のホームページを参照。

茶

1) 炭疽病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病葉は5.4葉/㎡(平成16.3葉/㎡)と平成比少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平成比やや少～少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平成並かやや低く、降水量は平成並か多い予想である。

(3) 対策 ア 常発地では、摘採残葉の発病状況に注意するとともに、秋期の発生は翌春一番茶の収量・品質に及ぼす影響が大きいので、萌芽～3葉期に防除する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

2) チャノコカクモンハマキ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、被害葉は0.6葉/㎡(平成0.8葉/㎡)と平成並の発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップによる誘殺数は、7月4半旬まで平成比少、茶業研究所(御船町)では平成並に推移している。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平成比やや少～少であった。

エ 気象予報によると、8月の気温は平成並かやや低く、降水量は平成並か多い予想である。

(3) 対策 ア 生産環境研究所(合志市)におけるフェロモントラップの平成の発蛾最盛期は7月6半旬～8月1半旬である。ほ場を見回り発蛾最盛期から7～10後の若齢幼虫期を対象に防除する。特に、三番茶摘採後が防除適期となる。

3) チャハマキ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、被害葉を認めなかった(平成0.1葉/㎡)。

イ 生産環境研究所（合志市）のフェロモントラップによる調査では、平年比少、茶業研究所（御船町）は、7月2半旬に発蛾最盛期を認め平年比多であったが、4半旬には平年並の発生となった。

ウ 病害虫防除員のからの報告では、7月の発生は平年比少であった。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年並かやや低く、降水量は平年並が多い予想である。

- （3）対策 ア 生産環境研究所（合志市）におけるフェロモントラップの平年の発蛾最盛期は8月1半旬である。ほ場を見回り発蛾最盛期から7～10日後の若齢幼虫期を対象に防除する。

4）チャノホソガ

（1）発生量：やや少

（2）根拠 ア 7月の巡回調査では、被害葉数は0.3葉/m²（平年4.9葉/m²）と平年比少の発生であった。

イ 生産環境研究所（合志市）のフェロモントラップによる調査では、平年比やや少、茶業研究所（御船町）は平年比やや多の発生であった。

ウ 病害虫防除員のからの報告では、7月の発生は平年比やや～少であった。

エ 気象予報によると、8月の気温は並かやや低く、降水量は平年並が多い予想である。

- （3）対策 ア 産卵は新葉にのみ行われるので、三角葉巻前の秋芽萌芽期に防除する。

5）チャノキイロアザミウマ

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率は1.4%（平年2.6%）と平年並の発生であった。

イ 生産環境研究所（合志市）の粘着トラップおよび茶業研究所（御船町）のたたき落とし法による調査では、平年比少の発生であった。

ウ 病害虫防除員の報告によると、7月の発生は平年並～やや少であった。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年並かやや低く、降水量は平年並が多い予想である。

- （3）対策 ア 加害は新葉のみ行われるので、秋芽萌芽期に防除を行う。

イ 中切り等の更新園、摘採中止園などでは、茶芽生育期間が長く、長期にわたり被害を受けやすいので、残効の長い薬剤（有機リン系、カーバメート系、合成ピレスロイド系）で防除する。

6）チャノミドリヒメヨコバイ

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率は11.8%（平年4.4%）と平年比やや多の発生であったが、発生ほ場は限られていた。

イ 茶業研究所（御船町）の調査では、7月2半旬まで平年比多であったが、4半旬には平年並の発生となった。

ウ 病害虫防除員の報告によると、7月の発生は平年並～やや少であった。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年並かやや低く、降水量は平年並が多い予想である。

- （3）対策 ア チャノホソガ、チャノキイロアザミウマとの同時防除とする。

7）カンザワハダニ

（1）発生量：やや少

（2）根拠 ア 7月の巡回調査では、発生を認めなかった（平年の寄生葉率0.7%）。

イ 茶業研究所（御船町）の調査では、平年比少の発生であった。

ウ 病虫害防除員からの報告では、7月の発生は平年並であった。
エ 気象予報によると、8月の気温は平年並かやや低く、降水量は平年並が多い予想である。

- (3) 対策 ア 一般に8月下旬ごろから発生が多くなるため、茶園をよく観察し、発生を認めたら防除を行う。
イ 密度が高い場合、どの薬剤も効果が低下するため、発生初期の防除に心がける。
ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

カンキツ

1) かいよう病

(1) 発生量：並

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病葉率 0.9 % (平年 3.9 %)、発病果率 0.2 % (平年 7.0 %) で、平年比少の発生であった。
イ 果樹研究所(宇城市)の調査(無防除樹甘夏)では、7月4半旬の春葉で発病を認めず(平年 5.2 %)、果実の発病率が 6.0 % (平年 25.6 %) で平年比少の発生であった。
ウ 病虫害防除員からの報告では、7月の発生は平年やや多～やや少であった。
エ 気象予報によると、8月の降水量は平年並が多い予想である。
(3) 対策 ア 夏秋梢のミカンハモグリガ食害痕に、本病が発生しやすいので防除を徹底し、発病した葉・枝・果実はなるべく剪除する。
イ 強風雨は、致傷及び水媒により感染を助長するため、防風ネット等の対策を講じる。

2) 黒点病

(1) 発生量：やや少

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病果率 0.2 % (平年 3.1 %) で、平年比少の発生であった。
イ 果樹研究所の調査(無防除樹興津早生)では、7月4半旬の発病果率は 87.5 % (平年 77.6 %) で平年よりやや多く、発病度は 14.9 (平年 24.0) で平年よりやや低かった。
ウ 病虫害防除員からの報告では、7月の発生は平年並～やや少であった。
エ 気象予報によると、8月の降水量は平年並が多い予想である。
(3) 対策 ア 枯枝が伝染源である。剪定枝を園内に放置していると発病が多くなるので園外に持ち出して処分する。
イ 降水量 200 ~ 250 mm、または前回散布から 25 ~ 30 日経過したら防除を行う。週間天気予報等を利用し、計画的に防除を行う。

3) ミカンハダニ

(1) 発生量：並

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率 5.9 % (平年 11.7 %)、10葉当たりの寄生頭数は 1.0 頭 (平年 5.2 頭) で、平年比やや少の発生であった。
イ 病虫害防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多～並であった。
ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か低く、降水量は平年並が多い予想である。
(3) 対策 ア ミカンハダニの要防除水準は、メス成虫寄生葉率 30 ~ 40 %、10葉当り 5 ~ 10 頭である。
イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

4) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、被害果率 1.0 % (平年 1.7 %) で、平年並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多～並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か低く、降水量は平年並か多い予想である。

(3) 対策 ア 発生程度の調査は、展着剤または洗剤の 5,000 ～ 10,000 倍液をコップやビーカーに入れ、その液で果実 (100 果) を洗い、洗った液をティッシュペーパーでこし、ルーペや実態顕微鏡を用いて虫数を調査する。10 頭以上を確認したら直ちに防除する。

5) カイガラムシ類 (アカマルカイガラムシ・ナシマルカイガラムシ)

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並であった。

イ 気象予報によると、8月の気温は平年並か低く、降水量は平年並か多い予想である。

(3) 対策 ア 薬剤による防除は、効果が高い幼虫発生初期に行う。例年、アカマルカイガラムシの第二世代幼虫は7月下旬～8月上旬、ナシマルカイガラムシの第二世代幼虫は7月下旬～8月中旬に発生する。

ナシ

1) うどんこ病

(1) 発生量：少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病を認めなかった (平年発病葉率 0.0 %)。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は認めなかった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か低く、降水量は平年並か多い予想である。

(3) 対策 ア 収穫期から収穫後に発生し早期落葉により樹勢が低下するので、発生初期に薬剤を散布する。

2) ハダニ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率 1.3 % (平年 5.3 %) と平年比やや少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か低く、降水量は平年並か多い予想である。

(3) 対策 ア 本虫の要防除水準は、メス成虫の寄生葉率 20 % 以上、1 葉当り 1 ～ 2 頭である。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

カキ

1) 炭疽病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病葉率 0.5 % (平年 0.2 %) で、平年並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か低く、降水量は平年並か多い予想である。

(3) 対策 ア 徒長枝の発病が多くなると果実の発病も多くなるので、発病した枝は園外に処分し、病原菌の密度を下げる。

イ 発病後の薬剤防除では効果が低いので、薬剤の予防散布を徹底する。

果樹全般（カキ、ナシ、カンキツ類等）

1) カメモシ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 生産環境研究所（合志市）及び天草農業研究所（天草市）の誘殺数調査では、合志市の予察灯でツヤアオカメモシとチャバネアオカメモシが平年比やや多、天草市の予察灯では平年並～やや少となっている。フェロモントラップでは、合志市、天草市とも、ツヤアオカメモシ、チャバネアオカメモシの誘殺数は平年より少なくなっている。

イ ヒノキ球果の口針鞘数は、県内5地点（合志市、大津町、熊本市、宇城市松橋、宇城市三角）のうち7月下旬の値が最も高かったのは宇城市松橋で14.3、次いで宇城市三角が9.3（5地点平均6.5）であった。離脱（樹園地への飛来）の指標とされる25に達するには、やや時間がかかると思われるが、宇城地域では他地域に比べやや先行している。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～やや少であった。

(3) 対策 ア 果樹園への飛来初期は局在し、発見が遅れやすいため、園をよく見回り、早期発見に努める。

イ 最新の誘殺情報は、病害虫防除所のホームページを参照。

野菜病害

夏秋トマト（高冷地）

1) 葉かび病

(1) 発生量：少

(2) 根拠 ア 夏秋トマト産地で導入されている品種は、ほとんどが葉かび抵抗性品種で、葉かび病の発生を認めなかった。

イ 病害虫防除員からの報告では、葉かび病の発生を認めなかった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並または低く、降水量は平年並または多い予想である。

(3) 対策 ア 抵抗性品種に感染するレースが他県で確認されているため、抵抗性品種でも発病には注意する。発病した場合は、早期に慣行の葉かび病対策を行う。

イ 草勢が衰えると多発するため、肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。

ウ 換気を良くし、過湿防止に努める。

エ 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き、園外に処分する。

オ 早期発見に努め、発病初期のうちに葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行う。

カ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

2) すすかび病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率3.0%であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並または低く、降水量は平年並または多い予想である。

- (3) 対策 ア 草勢が衰えると多発するため、肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。
イ 換気を良くし、過湿防止に努める。
ウ 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き、園外に処分する。
エ 早期発見に努め、発病初期のうちに葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行う。
オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

夏秋ナス（平坦地）

1) すずかび病

- (1) 発生量：やや少
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率 1.3 % (平年 5.0 %) と平年比やや少の発生であった。
イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比少であった。
ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並または低く、降水量は平年並または多い予想である。
(3) 対策 ア 換気を良くし、過湿防止に努める。
イ 伝染源となる発病葉は早めに取り除き、施設外へ持ち出し処分する。
ウ 多発後は防除が困難なので、初期防除を徹底する。本病は葉裏から発生するため、葉裏にも十分かかるように薬剤散布を行う。
エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

夏秋キュウリ（高冷地）

1) ベと病

- (1) 発生量：やや多
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病葉率 52.7 % (平年 29.1 %) と平年比やや多の発生であった。
イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並であった。
ウ 気象予報によると、8月の降水量は平年並または多い予想である。
(3) 対策 ア 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き園外に処分する。
イ 肥料切れしないように適正な肥培管理に努める。
ウ ほ場の排水を良くし過湿防止に努める。
エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

2) 褐斑病

- (1) 発生量：やや少
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病葉率 0.7 % (平年 5.6 %) と平年比少の発生であった。
イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並であった。
ウ 気象予報によると、8月の降水量は平年並または多い予想である。
(3) 対策 ア 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き園外に処分する。
イ 窒素質肥料の多用を避け過繁茂にならないようにする
ウ 多発後の防除は困難なので、発病初期の防除に努める。

イチゴ（育苗床）

1) 炭疽病

- (1) 発生量：やや少

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発生を認めなかった(平年の発病株率1.3%)。
イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～少であった。
ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並または低く、降水量は平年並または多い予想である。
- (3) 対策 **ア 降雨による病原菌の飛散を防止するため、親株床、育苗床にはビニールで雨よけする。また、全面マルチや高設育苗を行い、泥水の跳ね返りを防止する。**
イ 頭上灌水は避け、株元に手灌水する。
ウ 育苗ポットの間隔を広げ、不要な下葉を除去し通風採光を良くする。
エ 発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。
オ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。薬剤散布は株元まで十分かかるように行う。特に、降雨後の摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので防除を行う。
カ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

2) うどんこ病

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率 13.3 % (平年 3.2 %) と平年比多の発生であった。
イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多～並であった。
ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並または低く、降水量は平年並または多い予想である。
- (3) 対策 **ア 盛夏期には新葉への病勢進展が抑制されるため、この時期に発病葉や不要な下葉などを取り除き、ほ場外で処分し、9月以降の伝染源を少なくする。また、定期的に予防防除を行う。**
イ 薬剤散布は葉裏に十分かかるようにする。
ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

夏秋キャベツ (高冷地)

1) 細菌性病害 (黒腐病、軟腐病、黒斑細菌病)

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発生を認めなかった (平年の発病株率 黒腐病2.4 %、軟腐病0.7 %、黒斑細菌病1.7 %)。
イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～少であった。
ウ 気象予報によると、8月の降水量は平年並または多い予想である。
- (3) 対策 **ア ほ場の排水を良くする。**
イ 被害残さの処分など、ほ場の衛生管理を徹底する。
ウ 発病後の防除は困難であり台風や大雨の後に多発するので、予防散布および風雨後に薬剤を散布する。

野菜虫害

夏秋果菜類

1) コナジラミ類

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、平坦地のナスでは寄生葉率 8.3 % (平年 14.4 %) と平年比やや少の発生、高冷地のキュウリでは寄生葉率 22.0 % (平年 16.4 %) と平年比やや多の発生、高冷地のトマトでは寄生葉率 15.0 % (平年 18.0 %)

と平年並の発生であった。コナジラミの種類は、平坦地のナスでは、ほとんどがタバココナジラミ、高冷地のキュウリとトマトでは、全てオンシツコナジラミであった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生はナスで平年比やや多、キュウリ、トマトで平年並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並または低い予想である。

(3) 対策 ア これから気温が高くなると発生が多くなるので、早期発見に努め、初期防除を徹底する。

イ ほ場内および周辺の雑草は重要な増殖源となるので、除草する。

ウ コナジラミ類に対する防除薬剤は、種によって効果が異なるものもあるので、種を見分け、適切な薬剤を散布する。

エ 薬剤散布は、下位葉や葉裏など植物全体に十分かかるようにする。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

2) アザミウマ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、平坦地のナスでは寄生葉率 16.7 % (平年 2.4 %) と平年比多の発生であり、高冷地のキュウリでは寄生葉率 2.0 % (平年 1.9 %) と平年並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～やや多であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並または低い予想である。

(3) 対策 ア ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色の粘着トラップを設置し、早期発見に努める。

イ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除草する。

ウ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

イチゴ(育苗床)

1) ハダニ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率 15.0 % (平年 4.9 %) で平年比多の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多～やや少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並または低い予想である。

(3) 対策 ア **イチゴのナミハダニは薬剤によって感受性が異なるため、平成21年7月17日付技術情報第5号(http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/H21/yosatsu/gi_jyutu_090717.pdf)等を参考に薬剤を選択する。**なお、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

イ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。

夏秋キャベツ(高冷地)

1) コナガ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生株率 10.0 % (平年 18.0 %) で平年比やや少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～やや少であった。

ウ フェロモントラップによる7月の誘殺数は、阿蘇市波野で平年比やや少、

山都町鶴底で平年並であった。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年並または低い予想である。

- (3) 対策 ア 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早期発見、早期防除に努める。
また、幼虫は葉裏に寄生しているので、薬剤は葉裏まで十分かかるように丁寧に散布する。
イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

野菜全般

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：やや多

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発生を認めなかった(平年の寄生株率イチゴ0.0%、トマト0.0%、ナス0.3%、キャベツ2.0%)。
イ フェロモントラップによる7月の誘殺数は、生産環境研究所(合志市)、い業研究所(八代市)、阿蘇市波野で平年比やや多、高原農業研究所(阿蘇市)、山都町鶴底で平年比多であった。
ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～少であった。
エ 気象予報によると、8月の気温は平年並または低い予想である。
(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。
イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵することもあり、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。
ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したら直ちに除去する。
エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。
オ 最新のフェロモントラップデータは、病害虫防除所のホームページを参照。

2) オオタバコガ

(1) 発生量：並

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、平坦地のナスでは寄生株率0.3%(平年0.1%)は平年並、高冷地のトマトでは発生は認めなかった(平年の寄生株率0.1%)。
イ フェロモントラップによる7月の誘殺数は、生産環境研究所(合志市)、高原農業研究所(阿蘇市)では平年並、い業研究所(八代市)、山都町鶴底では平年比やや少であった。
ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～やや少であった。
エ 気象予報によると、8月の気温は平年並または低い予想である。
(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、ほ場をよく見回り、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。
イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。
ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。
エ 最新のフェロモントラップデータは、病害虫防除所のホームページを参照。

トマト・ウリ類の育苗期の防除対策

近年問題となっているトマト黄化葉巻病、ウリ類黄化えそ病、ウリ類退緑黄化病は、育苗期に感染すると被害が大きくなります。発病を防止するためには、以下の防除対策を徹底することが重要です。

＜育苗期から生育初期の防除対策＞

播種・定植前の管理：

施設周辺及び内部の雑草や野良生えトマトは、ウイルスの伝染源、タバココナジラミ・アザミウマ類の生息・増殖場所となるので、必ず播種や定植の10日以上前までに除去する。

また、育苗期から栽培期間中も定期的に除草する。

施設内へのタバココナジラミ・アザミウマ類の侵入防止：

育苗施設やハウス等の開口部（天井、サイド、換気部など）には防虫ネットを必ず設置し、タバココナジラミ・アザミウマ類の侵入を抑制する。特に、育苗時に感染すると感染株は収穫皆無になる恐れがあるため被覆を徹底する。なお、目合いを小さくするほど侵入阻止効果は高くなるが、高温対策に留意する。

また、育苗ハウスは近紫外線除去フィルムを天井に使用するか、ハウス周囲に光反射マルチを150 cm幅で設置し、できるだけ侵入抑制を図る。

黄色または青色粘着トラップを施設内に設置し、コナジラミ類やアザミウマ類の早期発見に努める。

感染源の除去：

発病株は二次伝染源となるので、見つけしだい直ちに抜き取り施設外に持ち出し埋没処分するか、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理する。

薬剤防除：

防虫ネットのみでは、タバココナジラミやアザミウマ類の侵入を完全には防げないため、薬剤防除を併せて徹底する。また、育苗期後半、定植時には粒剤を施用する。

（注意：農薬使用にあたっては、使用方法、使用時期、総使用回数等を厳守する。）

農薬安全使用上の留意点

薬剤防除を行う際は、必ず登録のある農薬を使用し、ラベルなどで使用方法を確認し、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、薬剤の飛散により、ミツバチや魚介類など周辺動植物や環境へ影響がないよう、飛散防止対策を徹底するとともに、周辺住民や周辺の農業者・畜産業者・養蜂業者等へ事前に薬剤散布について連絡するなど、危害防止に努めましょう。

詳しい内容等については

生産環境研究所病害虫研究室（病害虫防除所）（TEL：096-248-6490）にお問い合わせ下さい。

なお、本文はホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。